

Van der Kaap-Deeder, J., Audenaert, E., Vandeveld, S., Soenens, B., Van Mastrigt, S., Mabbe, E. and Vansteenkiste, M. (2017). Choosing when choices are limited: the role of perceived afforded choice and autonomy in prisoners' Well-Being. *Law and Human Behavior*, Vol. 41 No. 6, pp. 567-78.

- 囚人のWell-Beingとその要因を研究することは重要
 - ✓ 一般に、囚人は、非拘禁者に比べてWell-Beingが低く、精神病の発症率が高いため (例: Boothby & Durham, 1999; Diamond, Wang, Holzer, Thomas, & Cruser, 2001; Green, Miranda, Daroowalla, & Siddique, 2005)
 - ← Well-Beingの低下は、投獄される前からかもしれないが (Adams, 1983), 投獄そのものの影響を指摘する研究もある (Haney, 2001, 2006; Liebling, 2011; Paulus, Cox, McCain, & Chandler, 1975)
 - ✓ Well-Beingは、監獄での自殺やその他のnegativeな結果に関係するため (Liebling & Ludlow, 2016)
 - ✓ 精神疾患の患者を対象とした研究では、Subjective Well-Beingは再犯にも負の関係が示唆されているため (Bouman, Schene, & de Ruiter, 2009)
 - ➡ 囚人のWell-Beingが考慮され、囚人のWell-Beingに関わる文脈的・個人的要因の特定に関心が高まっている (例: Crewe, Liebling, & Hulley, 2011)
- 囚人のWell-Beingに関する研究では、囚人のWell-Beingを低下させる要因となる要素を幾つか特定
 - 例: Picken (2012) のレビューでは、感情に焦点を当てたコーピング、面会の受け入れ、刑務所内での活動への参加、被害者への恐怖心の少なさが、男性囚人の適応とWell-Beingの向上に関連していることを明らかにした
- 刑務所での「自律性」と「選択の余地の認識」が重要な役割を果たす可能性はほとんど注目されていない
 - ← 刑務所では個人が自律性をほとんど経験しないと考えられているため
 - ・ 以下に説明するように、理論的な説明 (Ryan & Deci, 2000) と囚人の証言 (Ashkar & Kenny, 2008) の両方が、Well-Beingにとって自律性と選択の余地の認識の重要性を強調

Psychological Freedom and Volition Within Prison Walls

- 本研究は、自己決定理論 (以下、SDT) に基づく (Deci & Ryan, 2000; Vansteenkiste, Niemiec, & Soenens, 2010)
 - ・ SDTでは、自律性は、有能感や関係性ととともに、基本的・普遍的な心理的欲求と考えられており、その欲求が満たされることで、個人のWell-Beingや生活の質 (以下、QOL) が向上するとされている
 - ・ 自律性の欲求とは、ある活動を行う際に、自分の意志、心理的自由、自己承認の感覚を経験することを意味する

- ✓ 刑務所で自律性が満たされるのは、例えば、囚人が進んで刑務所の規則に従ったり、囚人が職員に対して不満を自由に言ったりするとき
 - ✓ 刑務所で自律性が満たされなくなるのは、例えば、囚人が価値のない活動に参加することを強制されていると感じるような、プレッシャーや心の葛藤を感じる時
 - ・ 今回の研究では、もう一つの重要な変数である「選択の余地の認識」が自律性と最も強く関係していると考えられることから、(有能感や関係性ではなく) 自律性の欲求に焦点を当てた (Reeve, Nix, & Hamm, 2003を参照)
- 自律性の充足によるメリットと自律性の欠如によるデメリットは、多くの実証研究によって明らかにされている (Degi & Ryan, 2000; Vansteenkiste & Ryan, 2013)
 - 例: 中国系移民のサンプルにおいて、自律性が満たされることは、positiveな感情, life satisfaction, 活力と正の関連がある一方で、抑うつ症状とは負の関連 (Vansteenkiste, Lens, Soenens, & Luyckx, 2006)
 - 例: 文化的に多様な4つの国 (ベルギー, 中国, ペルー, 米国) の大学生を対象とした大規模研究で、全ての国で、自律性が満たされることがlife satisfactionや活力と正の関連がある一方、自律性が満たされないことが抑うつ症状と関連 (Chen et al., 2015)
 - ・ 自律性の有益な効果を示す研究は数多くあるが、囚人の自律性に関する研究はほとんどない
- 理論的な観点から、囚人の自律性を認める必要性を指摘 (例: Goffman, 1961; Sykes, 1958)
 - 例: Andorno, Shaw, and Elger (2015) は、囚人が自律的な医療決定を行うことを認めるべきだと主張
- 囚人の自律性がWell-Beingにとって重要であることを示す間接的な証拠を提供する研究がある
 - 例: 勾留された青年男性が、監禁されることで自律性を失い、それがnegativeな感情を引き起こす (Ashkar & Kenny, 2008)
 - ➡ 囚人の自律性に関する研究は限られているため、本研究では、囚人が拘禁中に自発的に行動し、心理的自由を得た経験が、囚人の刑務所でのQOLを予測するかどうかを検討

Contextual Affordance of Choice as a Facilitator of Autonomy

- どのような条件が自律性を促進するか
 - ・ SDTでは、選択肢の提供は、社会的文脈が自律性の充足とそれに伴うWell-Beingを促進するための重要な経路の一つと考えられている (Ryan & Deci, 2000)
 - ・ 選択肢が与えられれば、人々は自分の興味、好み、価値観に最も適した行動を選択できる

- 個人の好みや価値観に合った活動を行うと、人は自己承認感、自発性、心理的自由を感じやすくなる (Mouratidis, Vansteenkiste, Sideridis, & Lens, 2011)
- これは、すなわち、自律性が充足するということ
- ➡ 刑務所内での余暇活動などの選択の余地が高いと感じている囚人は、日常生活においてより自発的に行動していると感じていると考えられる

- ✓ 選択の余地は、内発的動機付け、努力、タスクパフォーマンス、知覚された能力などの動機付けの成果に有益な効果をもたらす (Patall et al., 2008を参照)
- ✓ 選択が個人のWell-Beingに有益な影響を与えることを見出した研究もある (例: Meng & Ma, 2015; Quine, Wells, de Vaus, & Kendig, 2007)
- ✓ 選択肢がないことは、情緒的ストレス、身体的負担、健康の低下などの不適応に関連 (Schulz et al., 2012)

- 選択の余地を持つことは、自律性が制限された環境では特に重要で、選択肢が与えられることで、自律性の感覚を高めることができる
 - ✓ Langer and Rodin (1976) は、自律性が制限された状況下での選択の余地の役割を、老人ホームの入居者を対象に実験的に検証
 - ・ 選択肢 (例: 映画を観る、植物の世話をする) を与えられた入居者は、与えられなかった入居者に比べて、happinessや用心深さが高く、より積極的に関与していた
 - ✓ Kasser and Ryan (1999) は、老人ホームの入居者が自律性をサポートされていると感じることが、より自律的な機能の向上につながり、高いWell-Beingと1年後の死亡リスクの低下に関係すると報告 (Vallerand, O'Connor, & Blais, 1989も参照)
- 自律性と同様に、刑務所内での選択の余地の役割を取り上げた研究はほとんどないが、3つの異なる研究が、その間接的な証拠を提供

1. Woodall, Dixey, and South (2014) は、以下のことを明らかにした
 - ✓ 囚人は選択肢を認識し、それが適応的であると考えている一方で、選択肢の欠如はフラストレーションや不安の感情を引き起こす
 - ✓ 囚人の中には、刑務所に入る前には得られなかった選択 (例: 教育、医療) を刑務所が提供してくれると考える者もいた
 - ➡ このように、刑務所には、選択肢の否定と提供によって、拘束と解放の両方の機能があると考えられる
2. 未成年非行者が自分の生活集団を開放的なものと抑圧的なものとに分けて認識している (例: Van der Helm, Beunk, Stams, & Van der Laan, 2014)
 - ・ 未成年非行者が生活集団を開放的と認識するかどうかは、選択できる機会があるかどうか (選択の余地の認識) に一部依存する
 - ・ 未成年非行者は、

- ✓生活集団が開放的であると認識しているほど、積極的な対処、治療意欲の向上、攻撃性の低下に関連
- ✓生活集団が抑圧的であると認識しているほど、受動的な対処に関連
- ➡ 選択の余地は、開放的か抑圧的かを区別する要素の1つでしかないため、開放的な環境に関連したメリットが、選択の余地の認識によるものであるかどうかは不明

3. 手続き的公正 ((刑務所内の) 意思決定がどの程度公正で透明であると認識されているか) について

- ・手続き的公正の認識に不可欠なのは、自分の見解を表明でき (これは選択の概念に関連)、その見解が考慮されることを経験することである (これは自律性の充足に関連; Vandevelde et al., 2017)
- ・手続き的公正を高く感じる囚人は、刑務所内での非行の度合いが低いだけでなく (例: Reisig & Mesko, 2009), 再犯の可能性も低い (Beijersbergen, Dirkzwager, & Nieuwbeerta, 2015)

- ➡ 要するに、選択の余地の認識が、囚人のWell-Beingにつながる可能性があることを指摘する研究が幾つかあるが、この疑問を直接扱った研究が少ないため、研究する必要がある

The Role of Choice Valuation and Type of Choice

- 本研究では、選択の余地の認識が、自律性の充足とSubjective Well-Beingにどのように関連するかを検討することに加え、選択に関連する2つの問題を検討
 1. 選択の認識のメリットが全ての囚人に一般化できるかどうかを検討するために、選択を重視する度合いの役割を検討
 - ・選択を重視する度合いが影響しないならば、今回の調査結果は、選択肢を軽視している囚人であっても、選択肢が与えられていると認識することで利益を得られることを示唆する
 - ・選択を強く好む個人は、自律性を高める可能性のある条件や経験から恩恵を受けられる可能性があると言える (Schüler, Sheldon, Prentice, & Halusic, 2016; Schultheiss, 2008)
 - ← これをより極端に解釈すると、自律性やWell-Beingの観点から選択を認識することで得られるメリットは、選択を重視する人に限られ、選択を軽視する人には現れないと考えられる
 - ←→ SDTの観点では、選択を重視する度合いにおけるこのような個人差は、何の影響も及ぼさないか、少し影響を及ぼすだけに過ぎないと考えられる
 - ← 自律性はQOLにとって普遍的に重要であり、選択の余地の認識はlife satisfactionを高めると考えられているから (Deci & Ryan, 2000)
 - ➡ SDTに基づけば、誰もが選択の認識から利益を得ることが予測される
 2. 自律性やWell-Beingに関連する選択の種類を把握するために、選択の種類に応じて、選択の余地の認識によるメリットが異なるかどうかを探索的に検討

- ✓ 日中の活動 (余暇の過ごし方など)
- ✓ 社会的ネットワーク (電話をかけるタイミングなど)
- ✓ 身体的欲求 (シャワーを浴びるタイミングなど)
- ✓ 宗教的信念 (宗教活動に参加するかどうかなど)
- ➡ どのような種類の選択が囚人の適応に最も必要であるかについての知見を得ることを目的とした

The Present Study

- 本研究の目的は、選択の余地の認識と自律性の充足が囚人のQOLと正の関係にあるかどうかを調べ、選択を重視する度合いの役割を明らかにすること (Figure 1参照)
- ・ 具体的には、3つの理論主導型仮説と1つの探索的RQを検討
 - ✓ H1: 自律性の充足はQOLと正の関係を持つ
 - ✓ H2: 選択の余地の認識は、自律性の充足を高めることで、QOLと正の関係を持つ (すなわち、媒介する; Figure 1参照)
 - ✓ H3: 囚人が選択を重視するかどうかにかかわらず、選択の余地の認識と自律性およびQOLの両方との間に正の関係を持つ
 - ✓ 探索的RQ: 探索的な方法として、あるドメインでの選択の余地の認識が、他のドメインよりも自律性の充足やQOLとより強く関連するかどうかを検討

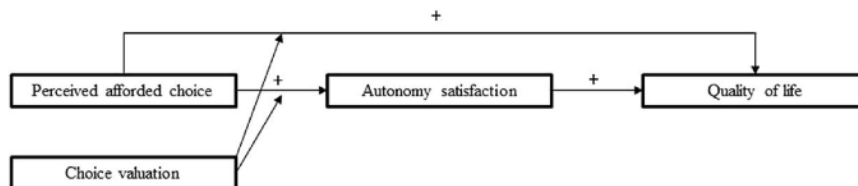


Figure 1. The hypothesized model based on self-determination theory.

Method

Participants

- サンプルの人口統計学的特徴と服役中の特徴はTable 1を参照
- ✓ 調査対象者 (N = 156) は、ほとんどが男性で、ベルギー国籍を所有
- ✓ 結婚している人は少数で、ほとんどの人には少なくとも1人の子どもがいた
- ✓ ほとんどの参加者の最高学歴は低中等教育以下
- ✓ 参加者の刑期については、ほとんどが有罪判決を受け、平均刑期は約7年
- ✓ 32.1%が暴力犯罪、18.6%が薬物関連犯罪、9.6%が財産犯罪、15.4%がその他の犯罪、22.4%が複数の犯罪で勾留されていた (3名の参加者については、この情報が欠けていた)

Table 1
Comparison of Characteristics Between Study Sample and the General Prison Population

Characteristics	Study sample	General prison population
Male gender	88.5%	95.6% ^a
Age	$M_{age} (SD_{age}) = 38.60 (11.68)$	52% between 21 and 35 years ^b
Belgian nationality	86.0%	55.0% ^a
Married	9.0%	19.3% ^c
At least one child	59.9%	49.0% ^c
Highest educational qualification: Lower secondary education	52.6%	53.1% ^c
Sentence status		
Convicted	65.0%	58.5% ^a
Accused	26.1%	31.7% ^a
Interned ^d	8.3%	8.2% ^a
Sentence length ≥ 5 yrs (convicted prisoners only)	52.6%	53.0% ^c
Previously incarcerated	42.0%	55.4% ^c

^a Justice Federal Public Services (2015). ^b Van Malderen, Pauwels, Walthoff-Borm, Glibert, and Todts (2011). ^c Maes (2016). ^d Internment is the imprisonment of mentally ill offenders who are regarded not to be responsible for their crime due to a psychiatric disorder. Through incarceration, internment is intended to prevent further harm both to the interned and to society (see also Vandeveld, Soye, Vander Beken, De Smet, Boers, & Broekaert, 2011 for an overview of internment in Belgium). ^e Vanhaegendoren, Lenaers, and Valgaeren (2001).

Procedure

- フランドル地方 (ベルギーのオランダ語圏) 内の7つの刑務所で実施
 1. 連邦司法省およびゲント大学の倫理委員会から承認を得た後、各刑務所の監督委員会に連絡を取り、研究の目的と方法について伝えた
 2. 各刑務所の担当者と話し合い、手配を行った
 3. 囚人には、研究の主な目的 (健康状態の把握) が書かれたチラシを配布して、研究の内容を知らせた
 - ✓ チラシには、囚人が「参加を希望するかどうか」「いつ参加するか」を記入
 - ✓ チラシは、刑務所内の郵送システムで配布・回収された
 4. これらの情報をもとに、本研究に参加を希望する囚人のスケジュールを作成
 - ✓ 参加の意思があっても、監督委員会が危険だと判断した者、評価時に制裁 (独房収容など) を受けている者、オランダ語能力が不十分な者は、参加から除外
 5. 2名の囚人でパイロットテストを実施
 - これに基づき、質問票の幾つかの項目に若干の変更を加えた
 6. 質問票は、研究者の監督のもと、個室で個別に記入
 - ✓ 紙と鉛筆を使って実施し、その間、参加者は自由に質問することができた
 - ✓ 7人の参加者は質問票を読むことが困難だったため、質問票を読み上げた

Measures

Background variables.

- ✓ 年齢、性別、国籍、学歴、配偶者の有無、子供の有無などの変数を評価
- ✓ 刑務所の体制と参加者の投獄歴などに関連する変数を評価

例: 刑務所 (7つの刑務所のうちの1つ), 判決状況 (被告人, 既決囚, 抑留者), 刑務所の体制 (開放, 準開放, 閉鎖), 刑務所での滞在時間, 刑期 (有罪者の場合), 過去の投獄歴, 現在の投獄の理由

※ 抑留: 精神疾患のために犯罪の責任を負わないとみなされた犯罪者を投獄すること。監禁することで, 非収容者と社会に更なる被害が及ばないようにすることを目的とする。

Perceived afforded choice. (選択の余地の認識)

- 選択の余地があることを経験した度合いを8つのドメインで評価
 - ← 大きく4つのタイプに分類 (日中の活動 (ドメイン: 余暇活動, 仕事, 教育), 社会的ネットワーク (ドメイン: 面会, 電話), 身体的欲求 (ドメイン: 食事, シャワー), 宗教的信念 (ドメイン: 宗教/精神))
 - ・ これらのドメインは,
 - ✓ 刑務所の心理社会的サービス部門との協議に基づく
 - ✓ 日中の活動 (例: Tuastad & O'Grady, 2013), 社会的ネットワーク (例: Cochran, 2014), 身体的欲求 (Vanhouche, 2015), 宗教的信念 (例: Maitland & Sluder, 1996) が, 囚人のWell-Beingにとって重要であることを示す実証研究に基づく
 - ・ 各ドメインで, 2つの質問をした
 - 例: 「スポーツなどの余暇活動に参加することが許されるかどうかについて, 選択の感覚がある」
 - ・ 1 (no choice) ~ 5 (a lot of choice) の5段階で評価
 - ・ 8つのドメインの回答を平均したスコア (計1つ) に加え, ドメイン別のスコア (計8つ) も用いた

Choice valuation. (選択を重視する度合い)

- 参加者が選択を重視する度合いを上記の8つのドメインのそれぞれで評価
 - 例: 「私は余暇 (例えば, スポーツ) のドメインにおいて, 選択肢があることが大切だと思う」
 - ・ 1 (not at all important) ~ 5 (very important) の5段階で評価
 - ・ 8つのドメインの回答を平均したスコアを用いた

Autonomy satisfaction. (自律性の充足)

- 参加者がどのくらい自律性の充足/欠如を経験しているかを評価
 - ・ Basic Psychological Need Satisfaction and Need Frustration scale (BPNSNF; Chen et al., 2015) の自律性サブスケールを使用
 - ・ 項目は, 簡易バージョンを用いた (Van der Kaap-Deeder et al., 2015)
 - ✓ 充足 (4項目)
 - 例: 「私は, 自分がやることに自由の感覚がある」
 - ✓ 欠如 (4項目)
 - 例: 「私は, 自分が本当はやりたくないことを強要されていると感じる」

- ・ 1 (not at all true) ～ 5 (completely true) の5段階で評価
- ・ 充足と欠如 (逆転項目なので反転) の総スコアを用いた (手順は, Baard, Deci, & Ryan, 2004などと同様)
- ← 表現を容易にするために, この総スコアを「自律性の充足スコア」と呼ぶ

Quality of life. (QOL)

- 参加者のQOLを測定
 - ・ World Health Organization-Quality of Life (WHOQOL-100 and the WHOQOL-BREF) の短いバージョンであるEUROHIS-QOLの8項目を使用 (European Health Interview Survey-Quality of Life; Schmidt, Mühlen, & Power, 2006)
 - 例: 「あなたは自身の生活の質をどう評価しますか」
 - ・ 1 (very bad/very unsatisfied/not at all) ～ 5 (very good/very satisfied/completely) の5段階で評価
 - ・ 8つの項目を合計した指標を用いた

Results

Descriptive Statistics and Preliminary Analyses

- 基本的な分析を実施し, 本研究の対象となる主要な変数間の頻度と関係を把握
 - ・ Table 2に示したように, 囚人は適度な選択の余地の認識, 自律性の充足, QOLを経験していた一方, 選択を重視する度合いはとても高かった
 - ・ 変数間の関係
 - ✓ 選択の余地の認識は自律性の充足とQOLと正の相関
 - ✓ 自律性の充足とQOLは正の相関
 - ✓ 選択を重視する度合いは選択の余地の認識, 自律性の充足, QOLと相関なし

Table 2
Descriptives of and Bivariate Pearson Correlations Between the Study Variables

Variables	<i>M (SD)</i>	1	2	3	4
1. Perceived afforded choice	3.14 (.79)	.89			
2. Choice valuation	4.36 (.53)	.12	.70		
3. Autonomy satisfaction	3.10 (.87)	.24**	.03	.86	
4. Quality of life	3.26 (.71)	.31***	.04	.31***	.79

Note. Chronbach's alpha internal consistencies for each scale are displayed on the diagonal.

** $p < .01$. *** $p < .001$.

- 背景変数に関して, ANOVAを実施
 1. 刑務所によって選択の余地の認識に有意な差が見られた ($F(6, 149) = 3.80, p = .002, \eta^2 = .13$)

2. 判決状況によって選択の余地の認識に有意な差が見られた ($F(2, 152) = 7.03, p = .001, \eta^2 = .09$)
 - ・ Tukey's HSDテストを用いた事後比較を実施
 - ✓ 被告人 ($M = 2.76, SD = .66$) は既決囚 ($M = 3.26, SD = .76$) よりも有意に少ない選択の余地の認識を経験 (mean difference = $-0.51, SE = .14, p = .001, 95\% CI [-.839, -.180], Hedges' g = .69$)
 - ✓ 抑留者 ($M = 3.30, SD = .92$) は、被告人、既決囚と有意な差のない選択の余地の認識を経験 (抑留者 vs. 被告人: mean difference = $-0.54, SE = .24, p = .07, 95\% CI [-1.107, .026], Hedges' g = .74$; 抑留者 vs. 既決囚: mean difference = $-0.03, SE = .22, p = .99, 95\% CI [-.556, .493], Hedges' g = .04$)
3. 刑務所の体制によって選択の余地の認識に有意な差が見られた ($F(2, 153) = 7.10, p = .001, \eta^2 = .09$)
 - ・ Tukey's HSDテストを用いた事後比較を実施
 - ✓ 開放 ($M = 3.51, SD = .84$) は閉鎖 ($M = 2.94, SD = .75$) よりも有意に多い選択の余地の認識を経験 (mean difference = $.57, SE = .16, p = .001, 95\% CI [.201, .935], Hedges' g = .73$)
 - ✓ 準開放 ($M = 3.23, SD = .71$) は、開放と閉鎖と有意な差のない選択の余地の認識を経験 (準開放 vs. 開放: mean difference = $.28, SE = .17, p = .26, 95\% CI [-.138, .689], Hedges' g = .36$; 準開放 vs. 閉鎖: mean difference = $.29, SE = .14, p = .11, 95\% CI [-.050, .634], Hedges' g = .40$)
 - ・ 背景変数と選択の余地の認識以外の測定値の間に有意な関係はなかったので、以降のモデルではそれらをコントロールしていない

Primary Analyses

- ・ Mplus 7 (Muthén & Muthén, 1998-2012) を用いて、最尤法による3つの構造パスモデル (Figure 1も参照) を用いて、仮説を検証

Hypothesis 1 and 2: The relation between perceived afforded choice, autonomy satisfaction, and quality of life.

- 最初の構造モデルでは、自律性の充足とQOLの関係を調べた (H1参照)
 - ・ 自律性の充足はQOLと正の関係にあった ($\beta = .31, p = .00, 95\% CI [.169, .454]$)
- 第2の構造モデルでは、最初のモデルに加えて、選択の余地の認識を自律性の充足とQOLの予測因子として追加 (H2参照)
 - ・ 選択の余地の認識は、自律性の充足 ($95\% CI [.098, .376]$) とQOL ($95\% CI [.079, .413]$) の両方に正の関係にあった (Figure 2参照)

- ・最初のモデルと同様に、自律性の充足はQOLと正の関係にあった (95%CI [.103, .404])
- ・自律性の充足を介した選択の余地の認識からQOLへの間接効果の有意性を検証するために、ブートストラップ法 (1,000回の抽出) を用いた
→ この効果は有意であった (95% CI [.012, .108], $\beta = .06$, $p = .02$)
- ➡ QOLは、選択の余地の認識によって直接的および間接的 (自律性の充足を介して) に予測された

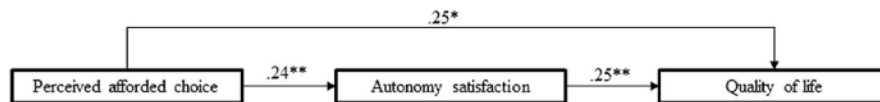


Figure 2. Structural model depicting the relation between perceived afforded choice, autonomy satisfaction, and quality of life. * $p < .05$. ** $p < .01$.

Hypothesis 3: The moderating role of choice valuation.

- 第3の構造モデルでは、選択を重視する度合いが、選択の余地の認識と自律性の充足の関係を緩和するかどうかを調べた (H3参照)
 - ・第2のモデルを基に、自律性の充足を予測因子として、選択を重視する度合いと選択の余地の認識との交互作用項を加えたところ、いずれも有意ではなかった (選択を重視する度合い: $\beta = -.01$, $p = .89$, 95% CI [-.181, .157]; 選択を重視する度合い × 選択の余地の認識: $\beta = 0.04$, $p = .62$, 95% CI [-.191, .111])
- 同様に、選択を重視する度合いが選択の余地の認識とQOLの関係を緩和するかどうかを調べた
 - ・第2のモデルを基に、QOLを予測因子として、選択を重視する度合いと選択の余地の認識との交互作用項を第2のモデルに加えたところ、いずれも有意ではなかった (選択を重視する度合い: $\beta = .02$, $p = .81$, 95% CI [-.179, .141]; 選択を重視する度合い × 選択の余地の認識: $\beta = .07$, $p = .47$, 95% CI [-.256, .118])
- ・これらのモデルのいずれにおいても、残りのパスは第2のモデルと類似

Exploratory Research Question 1: Examining domain-specific afforded choice.

- 自律性の充足とQOLの予測における選択の余地の認識の役割をドメインレベルで検討
 - ・選択の余地の認識のドメイン別のスコアを用いた
 - ・次に、8つのドメインそれぞれの選択の余地の認識と、自律性の充足・QOLとの相関を求めた (探索的RQ参照)
 - ・Table 3に示すように、
 - ✓ 日中の活動に関する選択の余地の認識は、自律性の充足とQOLの向上に関連

- ✓ 宗教的信念に関する選択の余地の認識は、これらの結果との関連性が最も低い
- ✓ 社会的ネットワーク・身体的欲求に関する選択の余地の認識は、主にQOLと関連し、自律性の充足とはあまり関連しなかった

Table 3
Descriptives of Perceived Afforded Choice per Domain and Bivariate Pearson Correlations With Autonomy Satisfaction and Quality of Life

Perceived afforded choice per domain	<i>M (SD)</i>	Autonomy satisfaction	Quality of life
Daytime activities			
1. Leisure activities	2.83 (1.11)	.16*	.35***
2. Work	2.99 (1.17)	.24**	.33***
3. Education	3.19 (1.01)	.22**	.15 [†]
Social networking			
4. Visits	3.05 (1.15)	.20*	.22**
5. Phone calls	3.37 (1.05)	.10	.20*
Physical needs			
6. Eating	3.40 (1.17)	.08	.15 [†]
7. Shower	3.05 (1.29)	.16*	.24**
Religious beliefs			
8. Religion/spirituality	3.17 (1.09)	.15 [†]	.04

[†] $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

Discussion

- ・これまで多くの研究が、刑務所以外の環境において、自律性の充足 (Chen et al., 2015) や選択の提供 (Quine et al., 2007) の有益な効果を指摘してきたが、これらと囚人のQOLとの関係を直接検討した研究はない
- ・囚人は、比較的Well-Beingが低く、精神病の発症率が高いことが分かっている (Boothby & Durham, 1999; Green et al., 2005)、このような人々の心理的健康を促進する要因を明らかにすることが重要である
- ・本研究の目的は、ベルギーの囚人が感じている選択の認識とQOLの関係を、自律性の充足の媒介となる可能性を含めて調査することであった

● その結果、幾つかの結論を得た

1. 他の環境において選択が個人のWell-Beingに有益な効果をもたらすことを示した先行研究 (Quine et al. 2007) と同様に、刑務所内で自分が意思決定できると感じることでQOLに正の関係をもたらすことがわかった
 - ・自律性の充足は、選択の余地の認識とQOLとの間に部分的に媒介することがわかったため、今後の研究では、SDTの他の要素 (有能感、関係性) が媒介する可能性を検討することができる
2. 第3の仮説に関連して、選択の余地の認識の有益な効果は、選択に付随する価値とは無関係であることがわかった

- ・これは、自分で選択することの重要性を評価していない、あるいは軽視している人であっても、選択の余地の認識は、個人の自律性やQOLを高めることを示す
 - ・このような知見は、自律性の充足を経験することは、全ての人にとって有益であるという普遍的な仮定と一致 (Degi & Ryan, 2000; Soenens et al., 2015)
 - ・文化的に多様な4つの国の個人が、自律性の必要性に対する欲求や重要性の有無にかかわらず、自律性の充足から恩恵を受けていることを示した Chen et al. (2015) の知見と一致
3. 選択の余地の認識は、日中の活動 (余暇活動, 仕事, 教育) のドメインで最も重要であり、他のドメインでの選択に比べて、より大きな自律性の充足とより高いQOLに関連することがわかった
- ・おそらく、囚人は日中の活動にかなりの時間を費やしており (他のドメインで費やす時間と比較して)、これらの活動において選択できることが、囚人のWell-Beingに対してより深い役割を果たしていると考えられる
 - ・宗教に関する選択の余地の認識は、今回の結果に最も強く関連しなかった
 - ・宗教活動に関する選択がどの程度有益であるかについては、個人の宗教への傾倒の度合いなど他の要因も影響していると考えられる
 - ・社会的ネットワークと身体的欲求に関する選択の余地の認識は、QOLには関連したが、自律性の充足にはほとんど関係しなかった
 - ・おそらく、これらのドメインでの選択は、SDTで提唱されている他の2つの心理的欲求 (有能感と関係性) により関連していると思われる
- 例: 訪問の長さや頻度のある程度選択できることは、他の人より強く繋がることのできるため、関係性の欲求を満たすために有益であると考えられる
- ・他にも2つの発見がある
1. 先行研究 (Green et al., 2005; Windzio, 2006) と同様に、囚人は、選択の余地の認識、自律性の充足、QOLについては中程度のレベルしか経験していなかったが、ほとんど全ての囚人が選択を重視する度合いを中程度から高いレベルで表明
 - ・このような選択を重視する度合いの高さは、自律性の欲求不満に由来するものかもしれない
 - ➡ いずれにしても、囚人が選択を高く評価していたという事実は、考慮すべき重要な要素である
 2. 背景変数に関しても興味深い結果が得られた
 - ・当然のことながら、被告人 (vs. 既決囚) と閉鎖的 (vs. 開放的) な体制で服役している囚人は、選択の余地が最も少ないことがわかった
 - ← これは、刑務所間の制度的な違い (例: 囚人の数) を反映していると考えられる
 - ➡ これらの要因を修正することで、囚人のQOLを向上させる可能性がある

Limitations and Future Studies

- 今後の研究では、本研究の幾つかの限界に留意すべき

1. 本研究のサンプルは、ベルギーの一般的な囚人と比較して高年齢の囚人 (Table 1参照) で構成されており、全員がオランダ語を話せなければならず、危険な囚人や制裁を受けていた囚人は除外されているため、かなり選択的で同質なサンプルであった
➡ 調査結果の一般化を図るためには、より異質なサンプルを用いた研究が必要
 2. Well-Beingの指標としてグローバルなQOLにのみ焦点を当てたが、Life Satisfactionや抑うつ症状などの指標を追加したり、刑務所特有のQOLの指標 (例: Liebling's Measuring the Quality of Prison Life尺度) を取り入れることが有効であろう
- 今後の研究の方向性として、仮説のより詳細な検証を行うことも考えられる
 - ✓ 例えば、他の文脈における先行研究では、欲求をサポートする方法で選択肢を提供することの重要性 (Moller, Deci, & Ryan, 2006; Katz & Assor, 2007) や、選択肢の複雑さを個人の認知能力に合わせることの必要性が指摘されている (例: Iyengar & Lepper, 2000)
 - ・ 支配的な方法で伝えられた選択肢 (例: 特定の選択肢を選択するように個人に圧力をかける) は、実際には、良いことよりも悪いことの方が多いかもしれない (Patall et al., 2008)
 - この可能性を刑務所で探ることは、刑罰政策だけでなく、SDT、選択の余地の認識と自律性の充足に関する理論的研究にも価値のある重要な洞察を提供する可能性がある
 - ✓ 異なる刑罰制度における選択と自律性の充足の異文化間の差異を調査することも価値があるかもしれない
 - 選択肢の提供は、意志を経験するための1つの道筋に過ぎないため、自律性の影響を探る今後の研究では、選択の余地の検討にとどまるべきではない
 - ・ Van der Laan and Eichelsheim (2013) は、拘禁されている少年犯罪者を対象に、仲間やスタッフとのpositiveな相互作用、明確で公正なルールの認識、日常活動の質の高さが、自律性の高さに関連することを示した
 - ← これは、文脈の幾つかの特徴が個人の自律性にとって重要であることを示唆
 - ➡ 自律性をサポートする環境の様々な特徴の役割と相互作用について、より多くの洞察が必要

Theoretical and Practical Implications for Quality of Life and Prisoner Rehabilitation

- ・ 本研究はSDTの枠組みに基づいて行われたが、今回の知見は、犯罪者更生のためのGood Life Model (以下、GLM; Ward & Stewart, 2003) によく一致する
- GLMは、リスク・再犯率の低減に加えて、より一般的な人間の欲求を満たし、犯罪者が「良い生活」を送れるように支援することに主眼を置いた、強みに基づくリハビリテーションモデルである (Ward & Brown, 2004)

- ・ GLMでは、人間の欲求と、それに起因する意欲 (例: 人間関係, 心の平和, 優れた仕事, 創造性) は基本的なものと考えられており, SDTとの自然な適合性を強調している (Ward & Brown, 2004)
 - ・ GLMの目的は「満たされることで心理的なWell-Beingを高める人間の欲求を促進すること」である (Purvis, Ward, & Willis, 2011を参照)
 - ・ 一見すると両立しないように見える2つの目的, すなわち, 犯罪の削減/社会の保護と, 犯罪者のQOL/Well-Beingの促進が統合的に取り組まれている (Ward, Gannon, & Fortune, 2015)
 - ➡ この2つの目標を達成するためには, 犯罪者の自律性の尊重や, SDTのその他の欲求が必要不可欠である
 - ➡ SDTとGLMとの間に関連性を示す研究を行うことは, これらの理論にとって有益である
- 今回の発見は, 犯罪者更生モデルにとって理論的に重要な意味を持つだけでなく, 囚人のQOLを向上させる上で, 実用的意味を持つ
- ・ ベルギーのフランドル地方では, 「囚人のケアとサービスの組織化に関する法令」があり, 各刑務所では, 文化, 教育, 健康, スポーツ, 職業訓練, 福利厚生に関する質の高いプログラムを提供しなければならない (Flemish Government, 2013)
 - ✓ 特に日中の活動についての選択の余地を強化する政策は, 囚人のQOLの向上に役立つと考えられる
 - ✓ 何をするかを選択できるだけでなく, 活動のスケジュールについても選択肢を増やすことができれば, 活動の参加率の向上に繋がる可能性がある